

ふるさと歴史館

第13回企画展

むかしむかしの物語

石岡の昔ばなしの世界



念仏鉦

荷鞍

平成30年**1月31日**(水)~**4月30日**(月)

入館無料

開館時間 10:00~16:30

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)

石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社1-2-10 石岡小学校敷地内 電話 0299-23-2398

むかしむかしの物語

—石岡の昔ばなしの世界

■目次

子は清水	2
八幡太郎と鞍掛の松	3
護身地蔵のはなし	4
十三塚のいわれ	5
長楽寺の天狗	6

■例言

本冊子は、平成30(2018)年1月31日～4月30日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第13回企画展に際して作成したものです。

展示及び本冊子の編集・執筆は、石岡市教育委員会 文化振興課(茂木 雅子)が行いました。

本冊子で使用した地図は、国土地理院数値地図25000から部分転用いたしました

子は清水 こはしみず

あらすじ

昔々、府中の街の方の村上という村里に、貧しい親子二人が住んでいた。田畑もないので、息子は毎日山にでかけ薪をとり、それを府中の街に背負ってゆき、売りさばいて毎日の暮らしを立てていたという。年老いた父は昔の元気もなく、息子が毎日街から買ってきてくれる酒を何よりの楽しみに暮らしている。今日も息子は朝早くから山にゆき、懸命に薪をとり、それを背負って街に出かけていったが、今日はいっこうに薪が売れなかった。「ああ困った、お父さんの酒が買えない、どうしよう」息子は途方に暮れながら家路へ向かう。父の落胆する顔が目には浮かび、息子の目には涙が落ちそうになる。「神様、仏様、どうすれば」と神仏を念じながら片並木に差し掛かった時、どこからともなく酒の匂いが鼻をかすめた。

匂いを追うようにして木立の中へ入っていくと、なんとそこにはきれいな水が芳醇な酒の香をただよわせて、こんこんと湧き出ている。息子は清水に走り寄り、腰の瓢（ひょうたん）を手にとり、その清水を汲み入れた。「ああ酒だ。よかったな」お父さんの喜ぶいつもの顔が眼に浮かぶ。

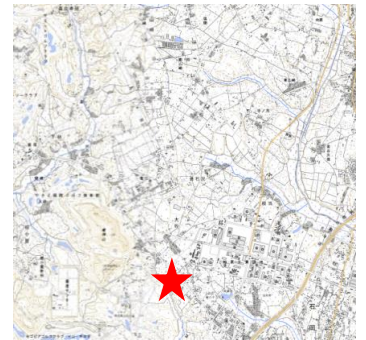
息子は足取りも軽く我が家に帰り、「お父さん、今日はいつものお酒とちがう酒ですよ」と言ってみましたが、息子は、心配でたまらない。心に神仏を祈りながら、かたずをのむ。渡された酒を父が一口飲むと、「これはよいお酒だ、これはうまい」と、心行くまで盃を重ねながら大喜びである。

息子は、その翌日、なんとも不思議でしかたがないので、昨日の清水のところに行って、飲んでみると、どうしたことかただの清水である。親が飲めば酒、子どもが飲むとただの清水という、「親は諸白、子は清水」というのはこれで、それ以来、息子は神、仏のおたすけと、信心深くなり、毎日この清水を親にすすめ、ますます養老を尽くし、年老いた父親はおかげで、やすらかな毎日を送ったという。

「子は清水」の舞台

子は清水は、あらすじにもあるように染谷に住む親子の物語です。付近には『子ハ清水』という地名が残されており、また染谷の隣の並木地内には、『親諸白子清水古蹟』と記された石碑があります。

子は清水の物語は、「聖武天皇の時代の頃～」という描写とともに伝えられているものもあり、奈良時代前半の頃の話かもしれません。



奈良時代の石岡

聖武天皇が即位していた701年～754年の頃、石岡市では、現在の石岡小学校の場所に国府が置かれ、さらに、常陸国のほぼ中心と霞ヶ浦の水運の近くという立地から、交通の要所として栄えていました。

741年には国分寺造立の詔が出され、その後、常陸国分寺・常陸国分尼寺が建立されることとなります。

農民の間でも鉄製農具が普及し、畑作農業が盛んになってきます。しかし、山上憶良は「貧窮問答歌」で、この頃の地方農民の苦しい生活の実態を描いており、常陸国の農民もその例外ではなかったと考えられます。子は清水の親子のように苦しい生活をしてきた人々も多かったのではないのでしょうか。



『親諸白子清水古蹟』と書かれた石碑

あらすじ

安倍頼時は、奥州全土を手に入れながら、租税を奉らないので、源義家は、朝廷からの命に従い、東西の兵をひきいて奥州へ行く途中、三村、八幡にさしかかった。この時、軍馬が非常につかれている様子に気付いた義家は、馬の背から鞍をおろし、一本の松の枝に鞍をかけ馬を休ませた。このことから、鞍かけの松とか、八幡鞍かけという地名がつけられたと土地の人はいふ。

さて、天下の義家が休養されるとあって一大事、人々は、もち米を持ち寄り一斗の水が入る大釜に角せいろを乗せ、赤飯を炊き心から歓迎したという。ここに、義家と素朴な村人との間に心温まる人間関係が生まれ、心身ともに兵士たちは休養できたといわれているが、何日滞在したかについては定かではない。このようにして、兵士、軍馬ともに元気をとりもどし、八幡、鞍かけを後にするとき、「休馬美落集」という巻物の中で、義家は村人に対し心から感謝の気持ちを表している。こうして元気百倍し、奥州に下った義家は、頼時を仕留めたのはよいが、その子、貞任は、父の仇とばかり頑強に抵抗したので、これを平らげるのに前後十一年かかった。これを前九年の役という。

以後、旧八月十五日を祭日と定め、この日は、人々が早朝、八幡様の境内に集まり、神社の内外を清掃して家に帰る。人々は着替えをして再び境内に集まり、祭神のお姿をお開きになり、そこで御神酒をいただき、祭の当屋に集まり祝宴をあげ、日頃の骨休みを楽しむ。こうした行事を行うようになってから、近郷近在の人々に知れわたり、八幡様にお祈りすれば願いがかなえられるということで、参詣にくるようになった

「八幡太郎と鞍かけの松」の舞台

八幡太郎と鞍かけの松の舞台は三村地内。三村には、『八幡』や『鞍掛』といった地名が残されています。

八幡太郎は平安時代後期の武将・源義家みなものよしえのことで、この物語は前九年の役(1051-1062)に向かう途中のエピソードですから、11世紀半ばの話と考えられます。



源義家(1036~1106)

平安後期の武将。源頼朝や足利尊氏の祖先にあたります。京都の石清水八幡宮で元服したことにちなみ八幡太郎義家と名乗っていました。

東北地方で起きた前九年の役、後三年の役などで大きな働きをし、全国に名を馳せました。全国的にも有名な武将の訪れは、地元の人にとって大きな出来事だったのでしょう。

平安時代の石岡

11世紀、都では藤原氏による摂関政治が行われ貴族たちが華やかな生活を送っていました。前九年の役が始まった次の年には藤原頼道により平等院鳳凰堂が建立されます。その一方で都から離れている東国地方では武士が徐々に力をつけてきます。

藤原氏全盛の時代に先駆けて、935年には平将門の乱が起こり、939年には常陸国府も平将門の襲撃にあいます。

現在の石岡小学校敷地内にあった常陸国府が機能していたのが7世紀から11世紀頃と推定されており、八幡太郎が石岡に立ち寄ったのは、国府の終末期の頃でしょうか。

石岡市内の八幡太郎の足跡

八幡太郎の行く先々では、様々な逸話が語り継がれており、石岡市内でも、八幡太郎にちなんだ地名が多く残されています。

- | | |
|--------------|-------------------|
| ① 五万掘（鹿の子地内） | 義家が軍勢を調べたら5万いた |
| ② 六万（東大橋地内） | この地で軍勢を調べたら6万いた |
| ② 生板池（東大橋地内） | 6万の兵の水炊きをするのに使われた |
| ③ 正月平（三村地内） | 正月の頃にここに差しかった |

茨城県内でも、源義家にゆかりのある場所や、義家にまつわる地名が多く残されています。

あらすじ

昔、舟塚山のあたりで戦があったとき、戦に敗れ手傷を追った一人の武士が、息を切ってこの地蔵付近まで逃げてきた。そのころこの辺りには民家まれで、ところどころに塵芥の塚があり、地蔵尊があるだけである。そこで追手の数人の武士がいよいよ迫って、手傷の武士も、あわやと思うとき、地蔵の加護からか、突如、突風が吹きおこり、あたりの土砂が舞い上がり、追手の武士たちの血走った眼に入り、眼をあけておられず、しばしたじろんだとき、手負いの武士のそばに一人の老婆が急にあらわれ、よしかたてをしていた。老婆は、手負いの武士の耳元に、口早に「そのごみの中に隠れる」という。武士はお礼のまなざしをおくり、いち早くごみの中に潜り込み息をじっと耐えていた。追手の武士たちは眼をこすりながら、老婆につめより、「ここに誰ぞきた者はないか」と、いきおいこんで訊く。老婆は平気な顔で、「誰もきませんよ」と答えるので、武士たちもあたりを見廻したが、それらしいものも見えないので、残取り逃がしたかと、踵を返しその場を立去ると同時に、老婆の姿もかき消すように消えてなくなり、籾穂と籩だけが残っている

危うく命を救われた武士は、老婆を地蔵の化身であろうと、地蔵の前に跪き、感謝の涙を流し、何度も礼拝して、名残惜し気に振り返りながらその場を立去った。がそれから数年後、その武士は再びここを訪れ、石の地蔵一基を寄進したという。それ以来、この地蔵を護身地蔵と呼ぶようになったということである。それらの地蔵は、昭和四年の大火災のため、堂宇とともに焼け崩れてしまい、今の地蔵はその後の寄進によるものだが、はげしい国道の通行者に、何事もないようにと、やさしいまなざしで六号国道をじっと見つめてござらっしゃる。

「護身地蔵のはなし」の舞台

護身地蔵の舞台は現在の国道6号線貝地交差点付近。

現在の交差点近くにあったそうですが、国道開通に伴い現在の位置に移動したようです。

物語中に出てくる舟塚山の近くの合戦が、いつの頃の合戦かは明らかではありませんが、おそらく戦国時代、石岡でも合戦が多く行われていた頃の物語ではないでしょうか。



戦国時代の石岡

奈良・平安時代に常陸国府があった場所には、この頃、府中城が置かれていました。また、府中城の他にも、三村城や高野浜城などが石岡地区に置かれていました。

戦国時代の石岡地区は府中城の大掾氏が納めていましたが、南には小田氏、北には江戸氏や菌部氏があり、攻防を繰り返していました。次第に大掾氏は勢力を弱め、1574年には三村城が、1588年には取手山館が落城し、1590年には佐竹氏によって府中城も落城し滅亡します。



現在護身地蔵が奉られている堂宇

お米が食べられるようになるまで

⑩ 籾の選別

⑧ 乾燥

⑤ 草刈り

③ 種まき



⑪ 保存

⑨ 脱穀

⑦ 稲刈り

⑥ 施肥

④ 田植え

① 田起こし

② 代掻き

出典：農業全書（国立国会図書館蔵）

あらすじ

昔いつの時代か定かでないが、ある日の夕方一人の旅僧が、筑波の方からこの集落へ来て、「この辺に山寺はないか。あったらそこで一晚厄介になりたい。」と言うので「この向こうに寺はあるが、寺は無住で雨露をしのぐだけ、それにこの寺に泊まった人で帰った者はないという。何か悪者がいるに違いない。この下の宿場へ行けば寺もあり、宿屋もあるから下へ行きなされ。」と村人は注意した。ところが旅僧は、「そんなところこそ泊まってみたい。もし悪人がいたなら、よく教えて善人にするのが坊主の持前だから。」と言って日暮れの道を寺へ急いだ。その夜旅僧は、放り出してある幕などをかぶり、着のみ着のまま横になった。真夜中、いつの間にかうとうとすると枕元に一匹の大猫が現れて「自分はこの寺に飼われていた猫であるが、この寺に年を経た大ねずみが住みついて荒れまわり、人でも猫でも、手向かうものはかみ殺す。自分も猫としてねずみにまけるのは口惜しいが、手に負えない大ねずみなので、自分独りではかなわない、お坊さんの力であと十一匹の大猫を集めてくだされば、力を合わせて退治したいが。」と言ったかと思うと旅僧の夢はさめた。

翌朝、旅僧は集落に出てこの話をし、村人と一緒にそちこちの大猫十一匹を借り集め、宵のうちに山寺に置いてきて、その晩は集落に泊まった。その夜寺では十二匹の猫と一匹の大ねずみが大いに怒っての大乱闘、吠え叫ぶ声が集落へ聞こえるほどの大騒ぎであった。旅僧は夜の明けのを待ちきれず、村人を促して薄暗い山寺へ行ってみると、寺の広間から廊下まで、かみ殺された猫の死骸、その中央には、金毛の生えた一匹の大ねずみが血に染まって死んでいた。村人はこれを憐れんで猫もネズミも一匹ずつ丁寧に葬って塚を築き供養をしたが、その十三の塚が集落の名となったと言われる。

「十三塚のいわれ」の舞台

十三塚いわれの舞台は、現在の小幡地区。十三塚という地名が現在もあります。十三塚から八郷盆地へ下っていくと、小幡の宿場町があり、旅の僧はそこへ行くように勧められたのでしょ。

この物語の時代は戦国時代、室町時代末期から安土桃山時代はじめの頃が舞台の話ではないかと考えられます。



戦国時代の八郷地区

考察で記されている小田氏治は上杉謙信や織田信長と同じころに生きた武将であり、1匹の大ねずみと12匹のねこの描写は、「手葡萄坂(手這坂・手葉井坂とも書く)合戦」と呼ばれる合戦等を通じて、小田氏が衰退していく様を表しているのではないかと考えられます。

室町時代末期、八郷地域は小田城(つくば市)に拠点を置く小田氏の勢力下でしたが、太田城(常陸太田市)を拠点とする佐竹氏がだんだん影響力を強めます。小田氏も佐竹氏や上杉氏、府中城を治めていた大塚氏らと様々な攻防を繰り広げます。



片野城跡にある太田資正の墓

手葡萄坂合戦は小田氏と佐竹氏側の太田資正(片野城主)が小幡地区において激突しますが、救援のため駆け付けた柿岡城の梶原政景と真壁城の真壁久幹の反撃により小田氏は大敗します。

戦国領主と仏教のかかわり

奈良・平安時代、仏教は「鎮護国家」を標榜とし、国家の平和を祈るためのものという要素が強いものでしたが、鎌倉時代になると民衆にも仏教が普及していきます。その後、武士の力が強くなり、寺院を中心とした寺社勢力も武力を高めるようになりました。

戦国時代になると加賀国(現在の石川県)では一向一揆が起こり当時の領主が倒されますが、その他にも大名の軍師や参謀として活躍する僧侶が出現するなど、大きな影響力や支配力を持っていました。

あらすじ

いつの頃やら定かでないが、そう古い時代でもあるまい。長楽寺は修験寺であったのか、老母とその子である若者が住んでいた。若者は、昼間は農事のかたわら老母に仕え、夜になると近くの足尾山、加波山の方面まで踏破して修業をおこたらなかった。ある夏の6月14日の晩、老母は若者に語りかけた。「お前がよくしてくれるので、このままお迎えがあっても恨みはない。欲をいえば日本一の祇園という明日の津島の祇園を見物してみたいが、津島というところは天竺へ行くほど遠いというから、諦めるほかないね」と冗談まじりに言った。若者はしばし考えていたが、「お母さん、津島はそう遠くはないよ、今から出かければ夜明けの頃までには着くから行きましょう」とすぐ行くことになった。若者は、白い行衣を着て老母を背負い、目がまわると困るからといって老母に手拭いで目隠しをして出かけた。老母は若者が、また私をからかい半分に、その辺を歩くのだろうぐらいに考え、背にしがみついているうちに眠ったかして何もわからなくなってしまった。

「さあ着いた」と若者がいうので、眼をさました老母は、眼の前の光景に驚いた。今まで話にはきいても見たことがない広い海、浜辺に集まっている何十隻とも知れぬ船が、色とりどりの旗をひるがえし、勇ましい笛太鼓のはやし、それを見物する人たちが浜に群れ、そのにぎやかなこと、老母にはまったく夢であった。その日の暮れ、老母はまた目隠しをされて若者の背に乗ったが、いつの間にか眠ってしまって、どこをどう帰ったか知らない。気がつくと朝日がさす長楽寺の庭だった。

若者もさすがに疲れたと見え、「お母さん、わたしは今日一日ゆっくり寝るから部屋へは決して来ないでくれ」と奥に入り、夕方になっても起きてこない。心配した老母は、来てはいけないと言われた奥の仕切りをそっと開けてみると驚いた。大の字になって高いびきをかいている若者の肩から、大きな羽が広がり、天狗そのままの姿であった。若者は、がばっと起き上がって腰を抜かしている老母に、「お母さん、あれほどいったのに見たな。もうお目にかかりません」というより早く見えなくなってしまった。

飛び立っていた天狗のその後

長楽寺の天狗は飛び立っていった後、どこへ行ってしまったのでしょうか。
この話には続きがあります。

ここは岩間の愛宕様、霜月十四日の夜の悪態祭りである。宵のうちから急な石段を登ってくる参詣人に、地元の若者どもは、口悪の限りを尽くして悪態をいう。それを覚悟の参詣人も、負けずにやり返す。やがて深夜の丑の刻、無言の行に入る前に、恒例どおり身を清めた十二人の若者が奥の院に鎮座する十二天狗に、一膳ずつの神饌を供え、終わったとき奥の院から「長楽寺分が足りない」との声があった。驚いた神主は、さらに一膳を供え十三膳として無事祭りを終わったというが、これは猪内の長楽寺の若者が、天狗となって家出をし、愛宕山奥の院の十二天狗の仲間に加わったのであろうと伝えられる。

(『八郷町誌』より)

「長楽寺の天狗」の舞台

長楽寺の天狗の舞台は現在の龍明地区。
今は無人となっていますが、長楽寺の本堂は現在も残されています。



現在も残る長楽寺の本堂



愛宕山の悪態祭りの由来はわかりませんが、愛宕神社の言い伝えによると、江戸時代中期からはじまったとされています。

この物語の舞台もおそらく江戸時代中期頃になるのではないのでしょうか。

石岡市立ふるさと歴史館第13回企画展

むかしむかしの物語

—石岡の昔ばなしの世界

平成30年1月31日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195 石岡市柿岡5680番地1

tel:0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016 石岡市総社一丁目2番10号

tel:0299-23-2398